

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830106

研究課題名(和文) 隔離収容施設における集団的実践の動態に関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文) The Historical Sociology on Dynamics of Collective Practice in National Sanatorium

研究代表者

有菌 真代 (Arizono, Masayo)

立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員

研究者番号：90634345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、インタビュー調査と文献資料の収集・分析に基づいて、戦後日本のハンセン病療養所・結核療養所において生じた多様な集団的実践の生成・展開過程を明らかにするとともに、隔離政策下に置かれた人々にとっての集団的実践の意味や効果について明らかにした。対象時期は、第二次世界大戦終戦(1945年)から現在までとした。2012年度と2013年度は、ハンセン病療養所の事例を中心として調査を進めた。本研究の成果の一部は、単著として2014年度中に刊行される予定である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to clarify the various aspects of collective practices of patients in a national sanatorium for Hansen's disease and Tuberculous people in Japan. In particular, fiscal 2013 and 2012, I was investigating the cases of a national sanatorium for Hansen's disease people. Some of the findings of this study, it is expected to be published during fiscal 2014 as the sole author.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ハンセン病 集団

1. 研究開始当初の背景

申請者のこれまでの研究は、近代医療システムのなかで周縁化された「病い」を生きる人々の生活世界を対象とするものであった。そのうえにたつて、周縁化のメカニズムに対抗・妥協しつつ、それらから自分自身を解放つ力に焦点をあわせて実証的な研究を続けてきた。ライフストーリー研究や医療社会学の領域に位置づけられるこの研究のなかで申請者は、これまで主に、2つのフィールドにおける集約的な調査を行ってきた。

ひとつは、性同一性障害者などセクシュアルマイノリティを対象とするものであり、大阪の自助グループでの参与観察と面接調査を、1998年から5年間継続してきた。もうひとつは、ハンセン病(元)患者(以下、ハンセン病者と略記)を対象とするもので、関東や九州の国立ハンセン病療養所(以下、療養所と略記)での聴き取り調査と、退所者への聴き取り調査、および支援グループの活動を通じての参与観察を、2004年1月から現在まで継続して実施している。

この二つの対象は一見すると乖離しているように見えるが、全体の研究の内部では密接に関連しており、一つのテーマの二つの現出領域として位置づけられる。そのテーマとは、簡潔に言えば、近代医療システムのなかで、いびつに歪曲された論理で「病」として名指され、主流の社会意識から過剰に(ときに暴力的に)周縁化されてきた存在の研究ということである。このふたつの「病」を生かされてきた人々の生活世界に寄り添って、彼ら彼女らの生活体験を把握することは、そのまま、近代医療システムの排除の構造を対象化することになる。しかし、こうした近代医療批判の次元よりもさらに重要なのは、当事者達がいかにしてこのような「病」を乗り越え、よりよい「生」を開拓していくために人間的努力を積み重ねてきたのか、という点である。申請者が、医療社会学の方法だけでなく、ライフストーリーの手法を重視してきたのは、そのためである。

ハンセン病問題を対象とする国内での研究は、医史学者の山本俊一の仕事(『日本らい史』東京大学出版会[1985-1991]1993)を嚆矢として、1980年代半ばに始まっている。申請者の研究開始時(2004年)までの研究は、ハンセン病政策史とりわけ隔離政策に関する歴史研究が主流であった。この時期までの研究によって、隔離政策という強力な圧倒的な管理システムの成立・展開と、そこからの命令を選択の余地なく押しつけられてきたハンセン病者の歴史が、かなりの程度明らかにされていた。だがこれらの研究は、主に「隔離する側」が残してきたデータを対象とするものであったため、為政者側の「統治」と「眼差し」の論理のみに分析が偏ってしまうという点では、限界を有していた。一方、当事者の側の経験を対象とする研究と

しては、蘭由岐子(『「病の経験」を聞き取る - ハンセン病者のライフストーリー』皓星社2004)が、この時点では唯一の論考であった。蘭はここで、生活史的手法によってハンセン病者の個別具体的な経験を取りあげることの持つ意義を示し、社会学におけるハンセン病研究に先鞭をつけた。ただし、当事者の具体的な経験を社会構造と関連づけて解明しようとする視点は十分ではなく、療養所に収容され隔離された人々の生活経験を、支配的なシステムの側からの「被害者」として、ともすれば一面的に解釈してしまうという点では、それまでの歴史研究と共通する問題点を残していた。

また、ハンセン病療養所入所者と結核療養所入所者は、近い境遇に置かれていたことからしばしば支援協力関係を築いていたが、両者の関係性に関して史実に即して跡づけた先行研究は、申請者の研究開始当初は存在しなかった。

そこで申請者は、医療やそれと結びつく社会的権力が、ハンセン病・結核患者の生にいかなるかたちで介入してきたのか、ハンセン病療養所入所者と結核療養所入所者がいかなる関係性を築いていたのかについて、療養所入所者の生活過程の具体的な水準から実証的に明らかにすることを目的として、研究に着手した。

2. 研究の目的

隔離政策下の療養所では、そこでの過酷な生活を少しでも改善していくために、様々な集団的取り組みが行われてきた。特に戦後は、当事者運動やサークル活動、同じ趣味を持つ者どうして結成される同好会、明瞭な「組織」という形式をとらない相互扶助的な集まりなど、大小さまざまな集団が活動を展開している。これらの集団の生成・展開過程における諸実践を、本研究では「集合的实践」と呼び、分析の対象にした。本研究は、インタビュー調査と文献資料の収集・分析に基づいて、戦後日本のハンセン病療養所・結核療養所において生じた多様な集合的实践の生成・展開過程を明らかにするとともに、隔離政策下に置かれた人々にとっての集合的实践の意味や効果について考察することを目的とするものである。

3. 研究の方法

本研究では、フィールドワークに基づく聞き取り調査と文字資料の収集・分析に基づいて、当事者達に固有の経験や意味世界を記述することを分析の出発点に据えた。さらに、社会的権力による生への介入を問題としつつ、それとわたりあう当事者の日常実践に着目することによって、状況の全体像へと接近する手法を採った。申請者の研究の特色は、生活史的方法を用いて、療養所(元)入所者

の生活過程における個別具体的な経験やかれらの意味世界に照準しながら、病者を捕捉したり排除したりしようとする社会的な力と、病者の生のあり方との、非対称だが緊張をはらんだ<せめぎあい>の水準を描き出そうとするアプローチにある。

4. 研究成果

本研究では、まず、組織的な形態をとった集会的実践(患者運動やサークル活動)の生成・展開について分析を行った。具体的には、(1)ハンセン病・結核療養所をめぐるどのような社会的条件の中から、患者団体やサークルが形作られていったのか、(2)患者団体や各サークルが、どのような要求を掲げ、具体的にどのような活動を行っていたのか、(3)施設当局の側が、患者団体やサークルの活動を、どのように掌握したり圧殺したりしようとしていったのか、(4)このような統治と実践のせめぎあいの過程で、療養所の制度や社会状況がどのように変わった(変わらなかった)のか、といったトピックについて、関東地方(多摩全生園)、中国地方(長島愛生園)、九州地方(星塚敬愛園)の各ハンセン病療養所に収容されていた(元)入所者からのインタビュー調査と、関連資料の収集・分析を通して明らかにした。結核療養所については、東京都内および福岡県内の結核療養所の元患者および元職員にインタビュー調査を行った。また、各地の公立図書館、結核研究所、感染症研究センターなどの関連機関において、資料収集および文献調査を実施した。

ハンセン病療養所および結核療養所の患者運動に関して、本研究の成果を、論文(「脱施設化は真の解放を意味するのか」内藤直樹、山北輝裕編『社会的包摂/排除の人類学 開発・難民・福祉』、206 - 219 頁、総頁数 255 頁、2014 年、昭和堂)にて公表した。ここでは当該時期の医療行政と当事者運動の関係性を跡づけながら、ハンセン病療養所および結核療養所における集会的実践がいかなる意味を持ってきたのかについて明らかにした。

本研究では次に、明確な「組織」的形態をとらない集会的実践(相互扶助的な活動など)の生成・展開について分析を行った。療養所内には、上述のような組織性の強い集団だけでなく、現金収入を獲得するための活動や、緊急時に必要資金を捻出する互助講に類似した活動など、インフォーマルでさらに生活過程に内在した活動を行う集団が、同時多発的に生成していた。本研究では、療養所生活を方向付けるひとつの重要なファクターとして集団参加とそこでの活動を位置づけ、その活動への主観的意味づけの多様性、活動を通じて新たに再編成されるネットワークの諸機能を、聞き取り調査と手記などの資料から考察した。

ハンセン病療養所の文化的活動に関して、

本研究の成果を論文(「留まる人々の『自由』文化発信の拠点としてのハンセン病療養所」『Contact Zone』5号、196 - 221 頁、2014 年 3 月、京都大学人文科学研究所人文学国際研究センター)にて公表した。ここでは、ハンセン病療養所における文化的活動がいかなるかたちで生成・展開し、これらの活動が入所者にとっていかなる意味を持っていたのかについて明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. 有園真代「留まる人々の『自由』文化発信の拠点としてのハンセン病療養所」『Contact Zone』5号、196 - 221 頁、2014 年 3 月、京都大学人文科学研究所人文学国際研究センター、査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

1. 有園真代「変奏する『集団』 選択できない/選択しない縁をめぐる一考察」関西社会学会第 64 回大会 若手企画部会「マイノリティをめぐる共同性の再構築」、大谷大学、2013 年 5 月 18 日

〔図書〕(計 1 件)

1. 有園真代「脱施設化は真の解放を意味するのか」内藤直樹、山北輝裕編『社会的包摂/排除の人類学 開発・難民・福祉』、206 - 219 頁、総頁数 255 頁、2014 年、昭和堂

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6．研究組織

(1)研究代表者

有菌 真代 (ARIZONO, Masayo)
立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員
研究者番号：90634345

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：